掲載日：2023年09月22日，面名：S106X0，記事ID：K2023092200000005600
(C)河北新報社

岩手大の坂口准教授、気仙沼・只越地区の記録誌作成へ

リアルな復興の歩み 残したい

住民や支援者らの思い 聞き取り

東日本大震災 12年半

東日本大震災で大きな被害を受けた気仙沼市唐桑町只越地区で、岩手大の坂口奈央准教授(48)＝災害文化＝が、被災した住民らを対象に復興の歩みに関する聞き取りを進めている。結果は記録誌にまとめる予定。坂口准教授は「震災から立ち上がる過程を検証し、教訓を残したい」と語る。

（気仙沼総局・藤井かをり）

坂口奈央准教授

葛藤や不安も

「津波で家が流され、夢であってほしいと願った」「自力再建の人がどんどん家を建て、不安でいっぱいだった」「復興の見通しが立つと少しずつ前向きな気持ちに変わっていった」

8月下旬、坂口准教授の呼びかけで住民や支援者ら約15人が地区の集会所に集まり、震災後に感じた思いを率直に語り合った。

聞き取りは4月に始まり、この日が3回目。車座での語り合いを重視する。坂口准教授は「関係者の葛藤や不安を含め、リアルな記録を残すのが狙い。震災から12年半たった今だからこそ話せる本音もあるはずだ」と説明する。

記録誌作成は、兵庫県の被災地支援事業で只越地区に派遣されたNPO法人神戸まちづくり研究所理事長の野崎隆一さん(80)＝神戸市＝から「復興の歩みを残したい」と相談されたことがきっかけだった。

住民や支援者の話に耳を傾ける坂口准教授（右奥から２人目）。左隣は野崎さん

「伴走型支援」

只越地区では117戸のうち約40戸が津波で被災した。野崎さんは阪神大震災の復興に携わった経験を生かし、地区で弁護士らと被災者の課題を把握する「伴走型支援」に取り組んだ。世帯ごとの個別相談を重視し、家庭事情や資産状況を聞きながら、被災者の負担感を極力抑えた防災集団移転につなげた。

今回の聞き取りでは「野崎さんらの支援のおかげで今の生活がある」と感謝の声が多く上がった。時間の経過とともに当時の状況を知る人が少なくなってきており、住民は「教訓を後世に残すことは地区にとって重要なこと」と記録誌作成に協力する。

坂口准教授は「只越地区は住民と支援者の歯車がかみ合った好例だ。復興の歩みや支援者の携わり方などを記録し、全国に発信したい」と話す。聞き取りは11月まで続け、来年6月の記録誌完成を目指す。